ストックごみの現状とその要因

第1部 大型ごみは「なぜ」ストックされるのか？

福岡大学工学部社会デザイン工学科 准教授 鈴木（すずき） 慎也（しんや）

「それは、もったいないお化けというものじゃよ。」かつてこんなフレーズの公共CMがありました。子供を相手に、大根やにんじんなど、嫌がらずにたくさん食べよう！ という趣旨のものでした。今では…、その意味合いが少し変わってきたかもしれません。

❶ はじめに

タンスや冷蔵庫など、全く使わないものをそのまま置きっぱなしにしてしまうのは「もったいない」です。使ってもらえる人に譲ったり、リサイクルしたり、モノとしての役割を最後まで全うできるようにしましょう。誰でも、老後は安心して穏やかに、楽しく過ごしたいですよね。そのためには、この「大型ストックごみ」†問題を避けては通れません。そこで著者らは、粗大ごみについては電気・電子製品や家庭系有害廃棄物と異なり退蔵に関する研究事例がないことを踏まえ、その実態調査を行い、特に高齢世帯に特徴的なストックごみの実態を明らかにしました。現状を垣間見てみましょう。

表1　大型ごみを退蔵している世帯の割合

分類	品目	普及率 全体	退蔵世帯割合 全体	退蔵世帯割合 高齢世帯	退蔵世帯割合 それ以外
家具・寝具	毛布	－	41.9%	52.6%	40.6%
	テーブル	－	31.9%	35.3%	31.5%
	タンス	－	24.6%	25.9%	24.4%
	マットレス	－	22.4%	22.4%	22.4%
	本棚	－	22.1%	23.3%	21.9%
	ベッド	60.5%※b	21.2%	19.0%	21.5%
	ソファ	－	19.0%	19.0%	19.0%
家電製品	テレビ	98.1%※a	29.6%	27.6%	29.9%
	扇風機	－	27.2%	26.7%	27.3%
	掃除機	98.1%※b	26.3%	24.1%	26.6%
	エアコン	92.5%※a	22.5%	22.4%	22.5%
	冷蔵庫	98.4%※b	22.0%	19.0%	22.4%
	こたつ	－	20.8%	23.3%	20.5%
	洗濯機	99.0%※b	20.5%	18.1%	20.8%
	大型スピーカ	－	8.9%	7.8%	9.0%
その他	自転車	82.8%※b	25.9%	20.7%	26.6%
	ミシン	69.3%※b	16.8%	12.1%	17.4%
	ゴルフバッグ	38.2%※b	16.3%	22.4%	15.5%
	ピアノ	23.6%※b	9.5%	12.9%	9.1%
	金庫	－	6.5%	6.0%	6.5%
	バイク	19.9%※b	4.9%	1.7%	5.3%
	リヤカー・一輪車	－	3.7%	3.4%	3.7%

※a: 内閣府・消費動向調査「主要耐久消費財の普及率」2016年3月時点における値
※b: 内閣府・消費動向調査「主要耐久消費財の普及率」2004年3月時点における値

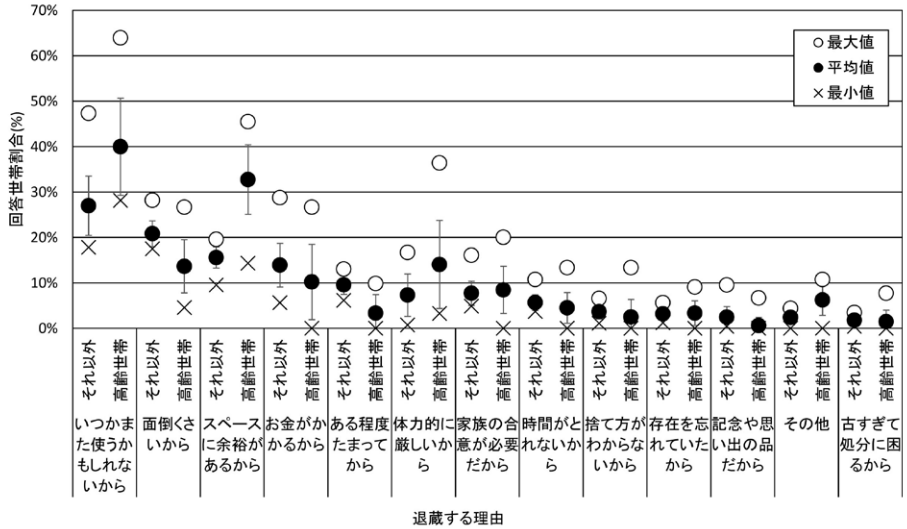

図1　大型ごみを退蔵する理由
高齢世帯（n=116）v.s. それ以外（n=921）

❷ 意外と多く退蔵している！

まずは表1をご覧ください。2016年11月に実施したアンケートの結果をまとめたものです。どの品目も2～3割程度の世帯で退蔵していることがわかります。毛布などにいたっては、高齢者全体の半数以上が退蔵しているのです。この調査では、実に77.6％の高齢世帯††が少なくとも1点の退蔵をしていること、世帯によっては10品目以上もの退蔵をしていることが明らかにされています。表1を見る限り、普及率と退蔵世帯割合が必ずしも比例していないことから、退蔵されやすさは品目によって異なることが示唆されます。家具・寝具については、高齢世帯のほうが退蔵する割合が高い傾向にあり、それを複数個退蔵する傾向にあるようです。

図1を見る限りでは、高齢世帯の場合、「いつかまた使うかもしれないから」、「スペースに余裕があるから」、「体力的に厳しいから」という理由が多くあげられています。これらの理由を、著者らの近縁者などに対する訪問調査の結果をもとに少し掘り下げてみましょう。

† 本稿では「家庭系一般廃棄物のうち、家電製品、不燃物あるいは粗大物に分類されるもの（袋に入れて排出できる可燃物、小物類は含まない）であって、所有者が使用・利用する意思がないにもかかわらず、一定期間（3年以上）排出されずにその管理範囲にとどめ置かれ続けているもの」と定義した

††「高齢単身世帯（65歳以上の者一人のみの一般世帯）および高齢夫婦世帯（夫が65歳以上、妻が60歳以上の夫婦一組のみの一般世帯）」という国勢調査における総務省統計局の定義

【事例 1】
天動説でも地動説でもない、
子どもを中心に親が回る“親”動説！

新たな学説の登場です（笑）。太陽を中心に地球が動くのではなく、子どもを中心に親が動き回っています。子どもが誕生した途端、親にとってはめまぐるしい毎日の始まりです。子どもはどんどん成長します。ベビーベッドが要る、チャイルドシートが要る…。子どもの成長に合わせて必要なものがどんどん変わります。親といえば、忙しい合間を縫って必要なものを買い揃えるのに精一杯です。いざ使わなくなっても落ち着いて適正処理を考える時間はありません。いずれは子ども部屋も確保してあげることでしょう。自転車やピアノが、子どもが成長して独立した後でも、家のどこかで眠ったままになっているのではないでしょうか？

しかも、子どもの持ち物はそれだけではないようです。独立して親もとを離れた後でも、使わなくなったものをかつての子ども部屋に運び込んできます。いくら使わないとはいえ、いきなり捨ててしまっては何だかもったいないし、子どもは子どもで自分の部屋（家）はすっきりする…。かつての子ども部屋はどんどん大型ストックごみを吸い込んでいきます。

写真１　子供時代の学習机と持ち込まれたテレビ・ビデオデッキ・扇風機など

【事例 2】
亡くなった人には相談できない

曾祖母が亡くなったことで、曾祖母の部屋に遺品が残されることになりました。もともと曾祖母だけが使っていた部屋なので、家族でさえ何となく立ち入りにくい、ましてやモノを処分しにくい…。気がついたら、もう 10 年以上も置きっぱなしになっています。部屋自体は、半ば物置と化しています。

写真２　曾祖母の遺品の電気こたつ
（押入れにあり、ほぼ存在が忘れられている）

【事例 3】
ものを捨てる話をすると口論になる！

こんなケースもあります。親御さんは、戦中戦後の厳しい時代を立派に生き抜いてこられました。簡単にものを捨てるなどありえないことです。息子が捨てる話をしようものなら、鬼の形相で口論が始まります。世代間の価値観等の「ぶつかり合い」がどうしても生じてしまうのです。「ぶつかり愛」に変えていきたいものですね。

以上を踏まえると、世帯構成の変化や世代間の食い違いがあると、大型ごみがストックされるきっかけとなるようです。ただし、もとはといえば、住居としてスペースに余裕があるから成り立つ話です。実際、いつかまた使うかもしれないと考え出してしまうと、なかなか捨てるには忍びないかもしれません。

写真３　父親所有の金属製ロッカー

【事例 4】
ものにも世代交代がある！
時代の波に取り残される！

CD が普及した途端、レコードやカセットテープをこよなく使い続ける人はグッと少なくなりました。今ではその CD ですら別の媒体に置き換わりつつあります。ビデオテープもそうです。ですが、DVD や Blu-ray Disc の時代になっても、お気に入りの作品は簡単には捨てられません。実際には全く再生しなかったとしてもビデオデッキなどを取っておきたくなります。

写真４　ラジカセ（大きいので置き場所がない。カセットデッキがついているので処分しにくい）

【事例 5】
ものとの絆は地域の絆

それだけではありません。かつて法事は地域ぐるみで行われていました。農村地帯では現在でも行われていることでしょう。普段は使わない食器でも、その時ばかりは大量に必要になります。それを入れるための食器棚なども結局は残り続けることになります。

写真５　ガスコンロ（法事などで使用したこともあるが、現在は使用していない）

【事例６】
重いものを持ち運ぶことを考えると、気分が重くなる

大型ごみは重いのです。どうしても重いのです。特にソファ、タンス、ミシン、ピアノなどは、体力的に厳しいという理由で多くストックされるようです。居残ってしまったゴルフバッグなども高齢者にとってはなおのこと負担になり、運ぶのも大変で、結局そのまま放置される結果となってしまうようです。

写真６　オルガン
（いざ処分するとなると大変そうだ）

【こんな事例も！】
プラスマイナスゼロの法則

スペースに余裕がない住居ではどうでしょうか？ 買い換えのたびに、今までのモノをリユースショップに引き取ってもらう家庭があります。それさえ続けていれば、モノを減らすのは難しいかもしれませんが、少なくともモノが増えることはありません。引き取ってもらえなければ、粗大ごみとして処分するしかありませんが、職場で使うという裏技も！？ ここで、上手に3Rのルートにもっていけるかは大きな課題でしょうね。

写真７ 空気清浄機
（職場で使うつもりだったが、結局退蔵している）

❸ まとめに代えて

いかがでしたか？ 当初、退蔵する理由には、「いつかまた使うかもしれないから」「スペースに余裕があるから」「体力的に厳しいから」といったことがあげられていましたが、大型ストックごみの現状を見ていくと、私たちの生活の大切な問題が浮かび上がってくるようですね。亡くなった曾祖母が使っていた電気ごたつや、かつて子どもたちが使っていた自転車やピアノがそのまま退蔵されるのは、なかなか家族に相談できず、そのまま放ったらかしにし続けて、気が付けば自分も高齢者になってしまった結果なのかもしれません。法事や町内会の催しものなど、地域との絆が深かった頃に使っていたガスコンロなど、今は使われていないモノも、生活環境のパラダイムシフトが進行する中で、遺物となりつつあるのかもしれません。ゴルフバッグにしても、ひょっとして皆さんも、置き場がなく、実家のかつての子ども部屋だった場所に置いているなど、実家を物置代わりに使っていらっしゃいませんか？ 解決に向かうためには、まずはモノとの向き合い方を考えること。それから、家族ときちんと向き合うことが大事だと思います。

私たちは「今」を生きています。今をよりよく過ごすためには、身の周りのものを一度じっくり見直し、「もしこれを片づけたら……」などと考えることが大切ではないでしょうか？ 捨てるのが心苦しいから残すのではなく、次世代に残していきたいモノは何かを考えてはどうでしょう。残さなくてもいいモノは、「こんな事例も！」で紹介したように、リユースショップを利用するのも一つの方法ではないでしょうか。そして、できれば家族みんなで相談できる機会を作れるといいと思います。家族一緒に実家のお片づけに取り組むのも、それこそ「それは、もったいないお化けというものじゃよ」など、楽しい時間になるかもしれません。

（廃棄物資源循環学会誌 第28巻 第3号 pp. 200-209（2017）に関連記事掲載）